目次に戻る

英文学概論　講義ノート

A History of English Literature, Lecture Notes

貝　嶋　　崇
Takashi KAIJIMA

キーワード：英文学概論，アングロ・サクソン語，英文学の起源

序

英文学概論を担当してから20年以上過ぎた。いままで英語のテキストを用い英文学の神髄に迫ろうとしてきた。特に，英文学であるから英文で書かれたテキストにこだわったため，英文のテキストを読める高等なレベルが学生に求めた。そのために，内容の理解が必ずしも十分でない場合あったと認めざるを得ない。それでも，英文にこだわった理由は，文学特有の理由があった。それは翻訳ではダメだと言うことだ。だからこそ平易な英文で書かれたテキストを模索する努力を続けた。しかし残念ながら，どのテキストも，取り上げ方が不十分であったり，また英文の構造がむずかしすぎて学生の理解を超えたものだったりしたために，満足のいくテキストはあまりなかった。また，テキストだけではなくその内容についても問題があった。欧米で出版される英文学概論書というものは，当然のことながら英語を母国語とするもの，すなわち，初等のイギリスの歴史や文化が身についているものために書かれていた。したがって，英語圏で育っていないものが本当の意味で理解するためには，さらなる背景的な知識が必要であるのに，その説明などが一切されていないというのが実情だった。

数年前から，イギリスの文化や歴史的背景などにも配慮しなおかつ英語も読めるようなテキストを考えてみようと思うようになった。本来であれば，英語を母国語のように読め，しかも文化的背景をしっかり講義などをとおして理解した学生を育ててから英文学を講義することが望ましいが，もちろんそうでない学生にも何とか読みながら英文学の精髄を伝えられる，そうしたテキストを作ってみようと考えて，本講義ノートを残す次第である。

今回は，時間とスペースの関係でその最初の部分をノートとしてここに公表する。また，最終的には，以下の章立てを考えている。

1. イギリス英語の起源
2. 詩の起源と発展
3. ドラマの起源と発展
4. 小説の起源と発展
5. イギリス文学の未来

イギリス英語の起源

まず，最初に背景的な知識として理解してもらいたいことは，イギリス文学の起源ははっきりとしていないということだ。いわゆる文学と言われるものは，口承の時代が長く続き，印刷物になったのは，文字やそれを残す手段としての媒体の発明などがなされて以降のことである。文学は人類がことばを話し始めるのと同時に始まったと言っていいだろう。したがって文学の起源を限定的に

特定することは出来ないということを理解して頂きたい。

さて，近代において，一般的に English Literature と言う場合は，多くのイギリス文学史ではこのリストの最初にあるように，チョーサー（1340-1400）がその冒頭にくるようである。むろんそれは，近代英語（Modern English）で書かれたものではなく，ほぼ近代英語の原型となった英語で書かれていたという位置づけだった。

しかし，18 世紀に初めて英語の辞書が編纂されてから言語研究がすすみ，それに比例して文学の研究も進んでいった。辞書においても最初は難語辞典であり，庶民の使わない特殊な語彙ばかり集めたものから出発し，市井のことばでもそれを出来るだけ正確に説明するという，流れになった。まず英語の起源に関して，19 世紀以前の学者はその言語をアングロ・サクソン（Anglo-Saxon）語と呼び，その言語は，当時のイギリス系の影響が強いが，それはドイツ系の言語と融合した言語だとの認識で一致していた。ところが，アングロ・サクソン語を古英語と呼び，英語の独自的な地位を守ろうとする愛国的な言語学者達がいた。ヘンリー・スイート（Henry Sweet）などの 19 世紀を代表する英語学者達は実はそんな言語学者達であり，彼らの大きな影響力で，イギリス文学の起源については，チョーサーからということが一般的に決定づけられた。

しかし，チョーサー以前の文学としてブリテン島にあった今は記録に残っていない文学を無視してはならない。アンガス（Joseph Angus）は，以下のように述べているとされる。

> English literature, Angus writes, was the refection of the national life, an exhibition of the principles to which we owe our freedom and progress; a voice of experience speaking for all time, to any who are willing to hear. ‘No nation,’ he adds, somewhat chauvinistically, ‘could have originated it but in circumstances like those of England, and no nation can receive and welcome it without reproducing in its life the image of our own.’

アンガスが言うには，英文学とはイギリス国民の生活を反映したものであり，民族の原理を描いたものであり，その原理のおかげで現在の自由や進歩を享受できているというのだ。さらに言い換えると，それはいつの時代にも通じる経験の声である。もちろん耳を傾けようとするものにとっての話しだが。さらにアンガスはこう述べている。「いかなる国家も，ある程度は愛国的であるが，必ずその固有の文学をもつ。たとえイングランドのような境遇にあってもそうだ。また，どの国家でも喜んで文学を迎え入れるが，その時には必ずそこにしっかりと国家の姿を再現している」

国家と文学や言語の関係は密接なものとしてみられていたことがわかるし，国家にとってその固有の言語の文学の有用性も理解できる。しかし，少し考えてみれば，ここではその国家と文学が単一のもので他と交わらずに存在しているというあり得ない仮定を土台にした議論であるとわかる。ビジネスのルールと同様に，言語自体も近在の国や交易をして互いに影響をしあって変容しながら存在し続けるからだ。

従って，ここではブリテン島の最初の文学を古期英語の文学とせずに，大きくアングロ・サクソン文学として理解することにする。おもにアングロ族はドイツ系の民族であり，サクソン族やジュート族は 5 世紀から 6 世紀にかけてローマからブリテン島へと侵略と略奪を繰り返して定住した。侵略された当時にブリテン島に住んでいたケルト系のキリスト教徒の民族は，南はウェールズやコーンウォール地方へと，北はスコットランドのハイランド地方へと追いやられた。6 世紀後半になると，キリスト教活動が認められて，北部ではケルト系の修道士，南部ではローマのベネディクト派

の修道士達が布教活動を活発化させた。

7世紀になりアウグスチヌス帝がローマからやってきてその圧倒的な武力により，ブリテン島の治安は安定化し始めた。当時を知る唯一の手掛かりとなる書であるアダム・ビード（673-735）が書いた『英国民国教史』によると，権力と共にアウグスチヌスは多くの祈祷書と祭祀に用いる品々をイギリスへともたらした。特にラテン語の聖書の朗読が教会の礼拝の儀式の一部として定着するようになった。次第にラテン語の影響は大きくなり，ビードも教会史をアングロ・サクソン語ではなくラテン語で書いている。記録として教会で行われた説教などが現在に残っている。

なかでも修道士のウルフスタンは，*SermoLupi ad Allglos* という説教集を今日に残しているが，それは当時教会に集ったアングロ・サクソン人への説教だった。また，その説教を行ったもの中に，カドモンという見習い僧もいた。彼は人前で歌うことなどできない小心者だったそうだが，ある日のこと夢の中でお告げを受け，創造主の神を称える詩を作りスコップといわれる偉大な吟遊詩人になった。

しかし9世紀にかけてバイキングの侵略がさらに激化して，教会はひどい大打撃を受けることになる。教会に保管されていた書物などは当時の北方からの侵略者バイキング達によってことごとく破壊された。

イギリス最古の文学と言われる『ベオウルフ』もそうした詩人（スコップ）の手になる作品でありその中にはバイキングも登場する。ただし『ベオウルフ』には宗教臭はあまりなくて，他の説教集とは違い，デーン王のベオウルフの活躍を描いた奇談となっている。そこにはベオウルフらが北方民族の野蛮な原始宗教を捨て，キリスト教徒に改宗する様子が描かれている。これが示すのは，バイキングと怖れられた北方民族もキリスト教徒と同じ人間であり，導き方で野蛮な異端の民族にもキリストの恩恵を与えることが出来るというキリスト教徒の優越的な考え方である。こうしてスコップらの作品は説教の枠を越えて当時の教会に集う民衆に深く浸透した。文学により教化するという目的が，文学はその枠をこえて，むしろ文学そのものの魅力である娯楽的な要素が大衆のこころを否応なく掴んでいくことになった。

『ベオウルフ』について

アングロ・サクソン語で書かれたキリスト教教化の前の時代の叙事詩で，現在残っているのは10世紀になって文字化された写本である。文体上の特徴としては頭韻が多用されていることと，比喩の一種であるケニング（kenning）という比喩法が用いられたことだ。ケニングとは，一般的な名詞に変わって用いられる迂言法の一種で，おもに古ノルド語やアイスランド語の詩にみられる。代称法ともいい，たとえば「鯨の道」を「海」の意味で，「平和をつむぐもの」を「女性」という意味用いたりする。こうした表現は現代人の目には，あるいみ稚拙なようにみえるが，一方でどこか原始的な新鮮なイメージを持っているようにも映る。

この詩はベオウルフの一生が描かれた英雄詩であり，そのストーリーはデンマークの王フロスガーに乞われてやってきたベオウルフがグレンデルという怪物とその母親を退治するという冒険物語である。しかし退治した所で終わらずに，さらにデンマークに凱旋して戻ってから，80才以上になってからも火を吹く怪獣と戦い退治する話である。以下の引用は，ドラゴンとの戦いのシーンからのものである。ただし，以下の引用は原語ではなく，それを現代訳にしたものである。

O’er the brattling of the boards, biting of the sword,
Crumbles, now the chiefs are dead. And the coat of ringed mail

May far and wide no longer fare with princes to the field
At the side of heroes. Silent is the joy of harp,
Gone the glee-wood' s mirth ;　never more the goodly hawk
Hovers through the hall ;　the swift horse no more
Beats with hoof the Burh-stead. Thus, unhappy did he weep
In the day and night, till the Surge of Death
On his heart laid hold[1].

また，これ以外にもベオウルフ最後のところを示す。古い英語はどのようなものか，以下のものを見て頂きたい。また古英語を学ぶものは少ないが今でも古英語を読む解説書は出版されているので，興味のある諸君はぜひ挑戦して頂きたい。

Hatað heaðomære　hlæw gewyrcean
beorhtne æfter bæle　æt brimes nosan;
se scel to gemyndum　minum leodum
heah hlifian　on Hronesnæsse,
þæt hit sæliðend　syððan hatan
Biowulfes biorh,　ða ðe brentingas
ofer floda genipu　feorran drifað.

Andrew Sanders, *The Short Oxford History of English Literature*（Clarendon Press; Oxford）, 1994, p. 20.

現在のアルファベット以外にも古い英語独特の記号などが用いられている。

なおこの『ベオウルフ』以外にも，『モールドンの戦い』や哀歌などが数多く残っている。『モールドンの戦い』は 991 年に勃発したエセックスの貴族とバイキングの戦いを描いた哀歌である。そこで貴族は殉教したとされているが，そこでの記述は曖昧で，現在では殉教だとなっているところが面白い。他にも一人称で書かれた *Deor* などもある。

800 年以前のバイキングはデーン人というオランダ系の祖先達だった。地の利の関係で比較的南部にあり，バイキングの度重なる侵入から免れたのは，ウェセックスを支配していたアルフレッド王（871-901）だった。アルフレッド王の一族は，イングランド南部でウェスト・サクソン語を話していた。ノース・サクソン語を話す住民達が住んでいる地区は北方に位置していたので，デーン人の侵略でその言語を話すものが根絶やしにされたのである。民族とことばはこの意味で密接なつながりがあることをここで肝に銘じなければいけない。生き残ったウェスト・サクソン語が基本になって，現在においてアングロ・サクソン語と呼ばれていることばを形作る。アルフレッド王の業績として，一族の生命や財産だけではなく文化や知識を僧院や学校などで残そうとしたことが挙げられる。それまでは知識人はラテン語一辺倒をもちいていたが，彼らも英語も次第に用いるようになった。だからこそ，アルフレッド王は今日では「英語散文の父」とまで言われている。彼の時代の書物としてあるのが，『英国年代記（*English Chronicle, or Annals*）』である。その中に，先ほど

[1] *English Literature; An Illustrated Record*, vol 1,（The Macmillan Company; London）, p. 15.

言及した『モールドンの戦い』などの詩が収蔵されている。

『モールドンの戦い』について

『ベオウルフ』は，ブリテン島での話ではないし，その主人公もいわゆるイギリス人ではなかった。しかし，『モールドンの戦い』は，そのバイキングと勇敢に戦ったエセックスの貴族ブリュフトノス（970-991）の物語である。この争いが起こったのは，991 年のことであり，この物語が書かれたのは，約 1000 年のことだと言われているので約 100 年後のことだ。その苛烈な戦いで殉死したとのことであるが，実際は彼の軽率な判断で，手勢がデーン人に負けて，デーン人が川を渡ったためにイギリスの大敗北となったのである。史実はともかく，神に見捨てられて戦場で散った勇敢な兵士として彼の精神はその後称えられることとなった。

『ルードの夢』について

その後イギリスの文学は次第にキリスト教化していく。先ほどの『ベオウルフ』にもベオウルフが洗礼を受ける場面があるが，この作品のタイトルの一部のルードというのは，十字架を意味する。アダム・ビードの『英国民国教史』中で，カドマン（?-680）がすでに旧訳聖書の一部の創世記や出エジプト記などを詩に訳したことは知られているが，その頃か一段とキリスト教の影響の濃い文学が現れるようになった。この『ルードの夢』もその一つであろう。物語は，天使たちが煌びやかに宝石をちりばめた十字架を崇めるところから始まる。語り手の詩人は，次第にその外見とその実の違いを意識するようになる。その十字架は栄光に輝いているが，実際は血にまみれたものだったのだ。惨めな兵士達の流した血を意識した詩人は，その豪華な十字架に対して悲しみを抱くようになる。するとその十字架が詩人に語りかけ，殉死した若い兵士が吊された木でその十字架は出来ていて，その十字架も兵士と同じ釘で打ち付けられ共に血を流したというのだ。イエスの受難に手を貸したと言うことで，廃棄された十字架は再び，’Lord’s thanes’ の手によって美しく変化を遂げる。そしてその十字架が話しをやめると詩人の夢からさめて，詩人のことばに喜びや尊敬や驚異の念がこもるようになったとされる。

デーン人による侵略と略奪を繰り返し受けてきたイギリスにもキリスト教の影響が庶民の間にも浸透していき，その中でイギリスはデーン人の影響下であったが，安定していたと考えてもいいだろう。それからノルマン人がやってきた[2]。

ノルマン人征服からチョーサーまで

モールドンの戦いから，70 年以上経った。その後バイキングから征服者としてブリテン島にヨーロッパ大陸から次にやってきたのは，ノルマン人だった。　ノルマン人の影響，言い換えるとフランスの影響はまず生活習慣や食事にまでその影響は及んだ。征服されるということはそうしたことである。圧倒的な生活の変化や価値観の変化などがことばに影響を与えないはずはない。したがって，次第にこれまでのアングロ・サクソン語の中にフランス語の語彙やことばが混ざり合っていくようになった。元々，アングロ・サクソンのサクソンはデーン語のことである。当初はデーン人から征服されことばにも影響が色濃く残り，その後にこんどはノルマン人から征服され同様にことばも大きく影響を受けた。国力と軍隊のか弱い島国は，外敵からの度重なる侵略や略奪により，こと

[2] ここでバイキングの以前からも侵略を受けていたことは常識として知っておいて欲しい。例えば，それは古代ローマ帝国である。古代ローマ帝国の支配は，ブリテン島はその南から，スコットランドとイングランドの間にあるハドリアヌスの壁までに及んでいたのである。

ばも含めて，生き残った人々はその状況に順応していった。

ノルマン人の征服から学者や宗教関係者によって多くの書がラテン語で書かれていたが，一般的に，それは退屈で面白みのないものだといわれている。おそらく学者等が書いたものは哲学的だったり，司祭が書いたものは訓話であったりで庶民にとっては総じて退屈だったのだろう。ところが，1132年に出たのは，その例外と言っていいような歴史書だった。

ジェフリー・オブ・モンマス（Geoffrey of Monmouth, c. 1100-c. 1150）によって書かれた *History of the Britons* である。彼によってアーサー王のこともわかってきたのである。ウェールズ出身の歴史家モンマスは事実の羅列ではなくほとんど創作と言っていいほどの歴史書を書いた。しかし，そこからリヤ王やアーサー王の物語などが派生していく。また，面白かったせいだが20年も立たないうちにラテン語からフランス語に翻訳される。こうしてイングランドの歴史に関してフランス語で書かれたものが出始める。当時の文学は大きく3つに分かれると，タッカー（T. G. Tucker）は述べている。叙事詩（エピック）と寓話（アレゴリー），さらには普段の生活を描いたものである。その中でも，叙事詩には大きな物語群があるというのである。それはカール大帝の物語群，アーサー王の物語群，それからトロイやアレクサンダー大王など当時からすれば過去の英雄達の物語群である。この時代の物語は魔法などの超自然的なものを取り上げながら，英雄の冒険や王への忠誠心をえがいたもので，現在同様多くのものがとても面白い。

13世紀に入ると，今度はフランス語ではなくアングロ・サクソン語で書かれたものが登場するようになった。1205年にラヤモン（Layamon）は『ブリュ物語』を書いたのだ。これはモンマスの歴史書のフランス版をまたアングロ・サクソン版にしたものでいよいよ，アングロ・サクソンの文学の始まりと言えるだろう。『円卓の騎士物語』，『オルムラム』，『フクロウとナイチンゲール』などが知られる。フランスにはないイングランドの人々の物語がやっと自国語であるアングロ・サクソン語で作られるようになったのである。

その中の一つである Cursor Mundi という宗教詩からの引用である。

Of King Arthur, that was so riche,
Was not in his tyme him liche ("like") . . .
Of Tristrem and Ysoude the swete,
How they with love first gan mete . . .
Stories of diverse thinges,
Of princes, prelates, and kinges,
Many songs of divers rhime,
As Engelish, French, and Latyne."

T. G. Tucker and W. Murdoch, *A New Primer of English Literature* (Whitecombe and Tombs Limited, 1911), p. 31.

英語，フランス語，ラテン語と様々な版で書かれた物語に触れているところと同時にアングロ・サクソン語ではなく英語と書いているところに注目して欲しい。

ノルマン人の征服から約3百年イングランドでは，ラテン語，フランス語，それから古い英語の3つの言語が用いられる。むろんそれは階級により異なり，庶民はイングランドの古い英語，宗教関係者はラテン語，政治をつかさどる上流階級はフランス語を用いていたことは容易に想像できる。よく言われるのが，教養の言語はフランス語，学問はラテン語，庶民はイングランドのその地区固有の方言を用いていた。庶民同士のいわゆる標準語というのはまだまだ生まれていなかった。ヨークシャー人の話す方言とミドル・セックス人の話す方言は多少異なっていた。標準語の役割を果たしていたのがフランス語であり，紳士たちはフランス語で会話をするのが通例となっていた。

ところが，フランス語が標準語となっていた時代も長くは続かなかった。それはその後に連綿と続くフランスとの小競り合いの戦いのせいで，次第にイングランドの貴族達の間に愛国心が育ち，自分たちが日常生活で用いている言語を復活させたく思ったからだった。1300 年頃にはいわゆる英語の原型をイングランドの上流階級でも話すようになり，1362 年には，法廷で正式に英語が使用されるようになった。これはフランス語がもはや標準語ではなくなり，正式に英語が標準になったことを意味し，その意味では，英語という言語が初めて勝利を収めたことを意味する。それは英語の時代の到来を意味した。

この講義ノートは，現代のものも含めて様々な英文学概論書の中から，最も簡略でわかりやすいと思う二つの英文学史を土台にして，書き進めている。

以下に記して，感謝したい。

T. G. Tucker and W. Murdoch, *A New Primer of English Literature*, Whitecombe and Tombs Limited, 1911）

Andrew Sanders, *The Short Oxford History of English Literature*, Clarendon Press, Oxford, 1944.

さらには以下のものからも引用させて頂いた。

Richard Garnett, C. B.，LL. D. *English Literature; An Illustrated Record*, vol 1, The Macmillan Company; London, 1905

資料として，今後の文学者リストを挙げておく。

The Lists of British Authors

ジェフリ・チョーサー（1340-1400）
エドマンド・スペンサー（1552?-1599）
ベン・ジョンソン（1573?-1637）
ロバート・グリーン（1560?-1592）
フランシス・ベイコン（1561-1626）
ニコラス・ユウダル（1505-56）
クリストファー・マーロウ（1564-93）
ジョン・ウェブスター（1580 年頃 -1634 年頃）
ジョン・ミルトン（1608 年 -1674 年）
ダニエル・デフォー（1660 年 -1731 年）
ジョナサン・スウィフト（1667 年 -1745 年）
アレキサンダー・ポープ（1688 年 -1744 年）
サミュエル・リチャードソン（1689 年 -1761 年）
ヘンリー・フィールディング（1707 年 -1754 年）
ローレンス・スターン（1713 年 -1768 年）
ウィリアム・ブレイク（1757 年 -1827 年）
ウィリアム・ワーズワース（1770 年 -1850 年）
ジェイン・オースティン（1775 年 -1817 年）
トマス・ド・クインシー（1785 年 -1859 年）
ジョージ・ゴードン・バイロン（1788 年 -1824 年）

メアリー・シェリー（1797 年 -1851 年）
エリザベス・ギャスケル（1810 年 -1865 年）
ウィリアム・メイクピース・サッカレー（1811 年 -1863 年）
チャールズ・ディケンズ（1812 年 -1870 年）
シャーロット・ブロンテ（1816 年 -1855 年）
エミリー・ブロンテ（1818 年 -1848 年）
ジョージ・エリオット（1819 年 -1880 年）
ルイス・キャロル（1832 年 -1898 年）
ヘンリー・スペンサー・アッシュビー（1834 年 -1900 年）
トーマス・ハーディ（1840 年 -1928 年）
ロバート・ルイス・スティーヴンソン（1850 年 -1894 年）
オスカー・ワイルド（1854 年 -1900 年）
ジョージ・バーナード・ショー（1856 年 -1950 年）
ジョージ・ギッシング（1857 年 -1903 年）
ジョゼフ・コンラッド（1857 年 -1924 年）
アーサー・コナン・ドイル（1859 年 -1930 年）
ケネス・グレアム（1859 年 -1932 年）
ジェームス・マシュー・バリー（1960 年 -1937 年）
H・G・ウェルズ（1866 年 -1946 年）
ジョン・ゴールズワージー（1867 年 -1933 年）
G・K・チェスタートン（1874 年 -1936 年）
W・サマセット・モーム（1874 年 -1965 年）
E・M・フォースター（1879 年 -1970 年）
ヴァージニア・ウルフ（1882 年 -1941 年）
ジェイムズ・ジョイス（1882 年 -1941 年）
A・A・ミルン（1882 年 -1956 年）
D・H・ローレンス（1885 年 -1915 年）
T・S・エリオット（1888 年 -1965 年）
アガサ・クリスティ（1890 年 -1976 年）
J・R・R・トールキン（1892 年 -1973 年）
ジョージ・オーウェル（1903 年 -1950 年）
イーヴリン・ウォー（1903 年 -1966 年）
セシル・デイ・ルイス（1904 年 -1972 年）
イアン・フレミング（1908 年 -1964 年）
ウィリアム・ゴールディング（1911 年 -1993 年）
ディラン・トーマス（1914 年 -1953 年）
アントニー・バージェス（1917 年 -1993 年）
ミュリエル・スパーク（1918 年 -2006 年）
アイリス・マードック（1919 年 -1999 年）
ウィリアム・トレヴァー（1928 年 -2016 年）
フレデリック・フォーサイス（1938 年 -）

マーガレット・ドラブル（1939 年 -）
ジェフリー・アーチャー（1940 年 -）
ジュリアン・バーンズ（1946 年 -）
サルマン・ルシュディ（1947 年 -）
イアン・マキューアン（1948 年 -）
マーティン・エイミス（1949 年 -）
カズオ・イシグロ（1954 年 -）
ジャネット・ウィンターソン（1959 年 -）
J・K・ローリング（1965 年 -）
ゼイディー・スミス（1975 年 -）